

市民20人でジオラマ完成



粘土で作る夢のまち

住みやすいまち、防災に強いまちをデザインするワークショップ「みんなで作る未来のまち 『森のねんど』で作ってみよう！」が11月14日、芦屋市立あしや市民活動センター「リードあしや」で開かれた。市民や親子連れら幅広い世代の20人が参加し、木くずが原料の粘土を使って家づくりの挑戦。光にあふれ、温かみのあるまちのジオラマが完成した。

発行元

芦屋市立あしや市民活動センター

リードあしや

奈良県大和郡山市にアトリエを構える、森のねんど

できた！憧れの暮らし

力合わせて「ターシャのまち」

私は『森のねんど』の講座を受けて、すごく良い体験になりました。

一つ目の理由は、グルーブでまちの名前を考えたことです。私達のまちの名前は「輝くターシャのまち」です。ターシャ・テューダーの自然の暮らしに憧れていたため、この名前にしました。また私は将来、山を買いたいという夢があったので、山の土地を選びました。

二つ目の理由は「森のねんど」がどんなものか、知ることができたことです。やわらかく、良いにおいが

作家・岡本道康さんが講師を務めた。参加者らは4つのグループに分かれ、それぞれつくりたいまちをイメージ。A「輝くターシャのまち▽B」幸せのうみのまち▽C「やたあきムラ▽D」やさしいが育つまち」と名前を決めた。岡本さんの指導の下、吉野杉の割りばしの木くずでできた「森のねんど」を使い、一人一人が家づくりに挑戦。ドアをつけ、窓を開け、色ねんどで屋根や壁を塗り、庭に木を植えて、完成させた。出来上がった作品は、幅約150センチのジオラマに乗せ、中から電球を点灯。家々の窓からは明かりがもれ、人々の暮らしが感じられるまちに仕上がった。岡本さんは「色のなかつたジオラマに、色が入り、明かりがともってきれいなまちができた」と講評している。



するねんどで、私には本当の森のにおいのように感じられました。三つ目の理由は、自分の家を作れたことです。オリ

ジナルの色を作ってくれるし、自分の好きなように組み合わせられるから良いと思いました。ねんどで木の葉やお花畑、動物など、い

人の繋がりが防災に

講師の岡本道康さんに聞く



いろいろなものを作ることができて楽しかったです。最後に、みんなの作品を全部集めて、明かりを一人一人の家の中に入れてつけました。家の光が集まってきたので、良かったです。（戸崎咲良）

講師を務めた岡本道康さんにインタビューした。

「森のねんどは、どのように開発したのですか。」

「原料は割りばしの木くずを砕いたもので、2012年ごろに開発しました。紙粘土は紙と糊、土粘土は土でできていますが、森のねんどは紙と土が混ぜ合わさった感じです。木の繊維が入っていることで、温かみのある作品になります。」

「これまで、どんな取り組みをしてきましたか。」

「いろいろな地域で森のねんどを使ったまちづくりに取り組み、ねんどを通して多くの人とつながりました。『形』にすることで、

人に伝えることができ、伝えることで多くのことが実現できると考えています。」

「今回のコンセプトは何でしょうか。」

「みんなで作ることで、つながりができる。その中で、『残したいもの』を見つけてもらえたら、このことが防災につながると考えています。」

「今日の感想を聞かせてください。」

「一人ひとりの思いを形にして集めることで、いい作品になったと思います。参加者が楽しそうに制作をしており、嬉しかったです。」

（聞き手・山崎真実、写真・常友青空）